

名古屋 文化情報

2014
5・6
May / June

No. 356
NAGOYA
Cultural
Information

随想／森本悟郎（表現批評） 視点／名古屋の室内楽の殿堂
この人と／櫃田伸也（画家） いとしのサブカル／古沢和宏（古書店主&ギャラリーオーナー）



2014

5・6

May / June

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 キュレーターという仕事… 森本悟郎(表現批評)… 3

視点 名古屋の室内楽の殿堂
「電気文化会館 ザ・コンサートホール」
「三井住友海上 しらかわホール」の
初期の自主企画事業を振りかえる…………… 4

この人と…
樫田伸也(画家)…………… 6

ピックアップ…………… 10

いとしのサブカル 古沢和宏…………… 11

おしらせ…………… 12

表紙

作品

「Theoria 100-03」

(2010年/銅版画/100×100cm)

タイトルにある Theoria / テオリアとは、ギリシャ語で「じつと見る」という意味です。身の回りにある何気ない自然物たちを、じつと観察することで、イメージネーションを膨らませ、制作を続けています。

川田 英二(かわだ えいじ)

1972年 高知県生まれ
1997年 名古屋芸術大学大学院美術研究科修了
2009年 「美術と遊ぶ展」稲沢市荻須記念美術館
2010年 「あいちアートの森 - 常滑プロジェクト」
2011年 「ファン・デ・ナゴヤ美術展 - 黒へ / 黒から」
名古屋市民ギャラリー矢田

「なごや文化情報」編集委員

倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
田中由紀子 (美術批評/ライター)
はせひろいち (劇作家・演出家)
米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2013年 名古屋市民文芸祭」
(第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
短歌の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

南山大学附属小学校5年
久野 桃佳
透明な金魚の稚魚はみじんこを食べて
日ごとに赤くなったよ

◆市会議長賞◆

名古屋市立鳴海中学校2年
波田 知紘
飛んでいく私の折った飛行機が
希望をのせて夢叶うまで

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立正保小学校6年
平野 琴音
真夏日にセミのコーラス聞こえてる
期間限定命を燃やせ

◆市文化振興事業団賞◆

椋山女学園大学附属小学校2年
小坂 橋恵麻
けいたいにお母さんからでんわです
母さん何のごようじですか

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

東海市立加木屋小学校2年
國武 咲弥
ひまわりはほくのせいより大きくて
夕日をじつとながめていたよ

◆中日賞◆

名古屋市立大杉小学校4年
遠山 愛歩
中学の作品展を見て来たよ
ねえちゃんの絵は金賞だった

随想

キュレーターという仕事



もりもと ごろう
森本 悟郎(表現批評)

名古屋市生まれ。武蔵野美術大学卒、同専攻科修了後、小学校から大学までの教職を経て、1994年から2014年3月まで中京大学アートギャラリーC・スクエアのキュレーター。

この3月末日をもって私は20年間勤めたギャラリーキュレーター(企画管理者)の仕事を終えた。

私がこの仕事に就いたのは1994年で、当時美術系の学部学科を持たない大学がアートギャラリーを設置することは異例だった。そのとき描いたプランは、①大学らしく実験的な企画、②可能な限り新作による展示、③ジャンルに拘らない、④名古屋で観る機会の少ない作家による、⑤原則として現存作家による個展、ということである。このプランを実行するためには外部の専門家の協力と客観的な評価が必要と考え、運営委員会を発足させた。これは一個人が独断専横に陥らないよう歯止めを掛ける意味もあった。学外委員は無報酬だったが、熱意をもってその任務を果たした確かな意見や提案を出すのみならず、作家への出展依頼や作品選定に同行することもあった。

私の勤務したギャラリーでは作品展示はするが収集はしないため、キュレーターとはいっても美術館学芸員(英語ではcuratorと訳される)のような作品収集、調査・研究、教育・普及といった仕事より、専ら展覧会企画、展示計画、管理運営が主たる仕事だった。とはいえ、選定した作家ならびに作品について、求められればいつでも解説文を書くことができる程度は準備したし、未知の作家探

索のため、時間と経済が許す限り、地元はもとより関東関西の美術館や画廊を見て回った。画廊を回る批評家や学芸員も多いが、私の自慢は貸画廊に繁く足を運んだことだろう。この日本独自の作品発表場所こそ原石の潜むところなのだから(もっとも、繁く足を運ぶということはその原石発見確率がいかに低いかという証左でもある)。

当館企画の展覧会は120回を超え、出展作家は延べ300人を超える。どの展覧会にも軽重はつけられないが、すべてうまくいったということはない。納得のいかなかった展覧会ももちろんある。その理由は、①作家とのコミュニケーションがうまくとれなかった、②作家あるいは作品の意図が理解できなかった、ということで、いずれも私の弱点が露呈したことによる。かつて作家活動をしていたこともある私としては、もう少し作家の身になって考えることができなかったか、と今更ながら反省せざるをえない。

そんな思いも含め今後は、前職で果たすことができなかったこと、たとえば表現上の課題などを、作家や批評家や学芸員や研究者など立場の異なる人たちが自由に意見交換し考える場をつくることや、それを核にした情報発信をしていきたいと考えている。

名古屋の室内楽の殿堂 「電気文化会館 ザ・コンサートホール」 「三井住友海上 しらかわホール」の 初期の自主企画事業を振りかえる

まとめ／渡邊 康

民間の企業が運営する室内楽専門のホール

名古屋のクラシック音楽専用ホールとして、とりわけ室内楽専門のホールとしてこの地区の文化振興の大きな役割を果たしているのが、民間の企業が運営する「電気文化会館 ザ・コンサートホール」(以下ザ・コンサートホール)395席と「三井住友海上 しらかわホール」(以下しらかわホール)693席である。

ザ・コンサートホールは昭和61年(1986年)、しらかわホールは平成6年(1994年)にそれぞれ開館した。以来この伏見地区に位置する両ホールは、名古屋の多くのクラシック演奏家と聴衆にとつての室内楽の殿堂として存在し続けている。

現在では室内楽ホールとしては栄地区の宗次ホール(310席)や、千種の5/R Hall&Gallery(111席)、そして名古屋市文化振興事業団が管理運営する各区の文化小劇場が積極的な企画で様々な演奏会を展開しているが、昭和の終わりから平成の初期にスタートしたこの両ホールが開館したその当時の自主企画は、明確なコンセプトを打ち出してひとつの特質ある名古屋の音楽文化を築き上げていた。そして今日でも根底でその財産を受け継いで文化の流れを感じることができるのである。

さてザ・コンサートホールが開館した昭和61年はバブル景気の始まりの年であり、しらかわホールが開館した平成6年はそのバブル期にはその豊富な資金が企業による資金提供となって「メセナ」と呼ばれる文化・芸術活動事業への援助・支援活動が盛んに展開されていたのである。そしてバブル期がはじけたその後の「失われた10年」でも、依然として「メセナ」活動は続いていた。規模の大きな企画が民間企業によって支えられていたのである。

その「メセナ」の流れは現在途絶えた訳ではなく、形を変えて継続しているのだが、クラシック音楽分野ではかなり、その流れに質、量共に変化があったと言えるだろう。この2つのホールに代表される名古屋の室内楽クラシック界、具体的にはそのコンサートのあり方にも初期の頃と現在ではかなりの変化がみられるのである。そして現在はまさに大きな過渡期である。前述したように宗次ホールや文化小劇場の現在の活動は新たな領域を広げているが、この伏見地区にあるコンサートホールの質と規模は名古屋のコンサートホールを牽引する存在である。

ホールには運営する事業部が自主的に展開する「自主企画事業」と「貸しホール」の機能があるのだが、その「自主企画事業」の内容が、ホールの音楽文化を創造し、地域文化における役割の方向性を決めることになる。そして民間企業の「メセナ」活動は、その時々々の社会の流れの中で変化していく必然がある。今回両ホールの開館時期の「自主企画事業」の内容を振り返ることで、名古屋のクラシッ

ク音楽の文化について考察する材料になればと考えた。

電気文化会館 ザ・コンサートホール

ザ・コンサートホールは昭和55年に中部電力創立30周年事業として検討され株式会社電気文化会館(現中電不動産株式会社)として昭和61年の7月に設立された。それまでには中電ホール(444席)と愛知文化講堂(約1400席、現在のオアシス21の場所)が主なクラシックコンサート会場で、新栄には名古屋市芸術創造センター(640席)ができたばかりの時期であり、より本格的な音楽ホールとして期待されての船出となった。

開館初年度のオープニングコンサート、アンコールコンサート、名古屋国際室内楽フェスティバル、モーニングコンサートなどが主な自主企画事業であり、どのコンサートシリーズも地元演奏家の活動を支援する内容であった。

オープニングコンサートは7月19日から8月3日の2週間。こけら落としは正式オープンの一日前に外山雄三指揮の名古屋フィルハーモニー交響楽団がオーケストラと2台のピアノで「動物の謝肉祭」を舞台一杯のメンバーで演奏し、室内オーケストラ演奏が可能な空間であることも示した。その後「クルト・エイクイルツのシューマン「詩人の恋」独唱会」「中西祥之シリーズコンサート」「邦楽ラブソディ・弥十介と11人の仲間たち」「ファンタスティック・フルート・アンサンブル 永長次郎 名古屋笛の会」「中村紘子ピアノリサイタル」「センチメンタル・パーティ センチメンタル・シティ・ロマンス」「長唄名曲選「長唄の四季」名曲選の会 吉住小真治・柗屋喜多六ほか」「愛知県合唱連盟25周年記念 おかあさんコーラス サマー・ジョイント・コンサート」「名古屋オペラグループ 夏休み音楽会「ごんぎつね」洞谷吉男」「佐々木侑利子ピアノ独奏会」「山田貢チェンバロリサイタル」「二期会オペラコンサート -オペラ



電気文化会館外観



電気文化会館 ザ・コンサートホール

Cosi Fan Tutte 女はみんなこうしたもの」「田村味智歌筆曲リサイタル」が連日開催されるといったラインナップであった。

中村紘子氏にこの新ホールのピアノ選定を依頼したこともあったのプログラムであるが、その他は名古屋の演奏家によるコンサートが開催された。邦楽やポピュラーもラインナップされているが初代営業課長(後の文化事業課長)野々山氏によれば、このような様々な異なった種類の楽器編成をこのホールで演奏することで、ホールの響きの可能性を探るといった目的もあったとのことである。

当時のエピソードとしては演奏家によっては響きが乗りすぎると感じ、今では利用されない壁面の角度を変えて残響時間を調節する機能を使ったり、すべての入り口ドアを開けて響かないようにしたりといったこともあったようである。邦楽の演奏家は普通の演奏会場の30~40%の力で十分に大きく響くという感想だったようだ。オープニングコンサート後、一ヶ月ほどで貸しホールとしての利用も増えて、100%の利用率を記録したのは、当時の公共ホールの40%~60%と比較して驚異的といわれた。

その後の特質ある自主企画事業は、5周年にして計画され7年目の平成4年からスタートした、「ザ・コンサートホール・アンコール」、「名古屋室内楽フェスティバル」(後に「国際」とつく)、平成6年からの「モーニングコンサート」である。

「ザ・コンサートホール・アンコール」(1992年~2005年)はその年に開催された地元演奏家のリサイタルの中から、優れた演奏会として地元音楽評論家の審査によって推薦され、会館が主催してもう一度その演奏家のリサイタルを行うもの。毎年3公演が選出されており14年間続いた。ここで選出されることは名古屋市民芸術祭と並んで地元演奏家の目標となっていた面があり、地元のクラシック音楽界の賑わいの起点となっていたといえる。

「モーニングコンサート」(1994年~2009年)は前述の野々山氏の、結婚後、子育てによって音楽会のみならず、社会や文化から離れてしまう若い人たちに本格的なホールで音楽を聴いてほしいという気持ちから始まった。その想いが若いお母さんたちに伝わり、自主的な広がりを見せSKIPという団体に発展しNPOとなる。5月から6月の期間に3つのコンサートが格安で開催された。演奏会の企画を核に、演奏会の開催だけにとどまらず、子育て中の若いお母さんたちの全国的な文化活動に結びついていったのである。

「名古屋国際室内楽フェスティバル」(1991年~2007年)は室内楽ホールとしての特徴を活かしたコンサートを内外の演奏家によって展開しようといったコンセプトであった。しらかわホールとの共催となり、室内楽の多くの側面に触れることができたシリーズである。外来のアーティストの世界一流の演奏を身近に感じ、また地元の演奏家が加わるコンサートが数多いのが特徴であった。

三井住友海上 しらかわホール

しらかわホールは、本格的な中規模コンサートホールで平成6年(1994年)に、当時の住友海上(現三井住友海上)がオープンした。1800席の愛知県芸術劇場コンサートホールと約400席のザ・コンサートホールと比較して中規模の693席である。セントラル愛知交響楽団が本拠地として定期演奏会を開催することもあって、中型の管弦楽まで対応できることが知られている。

そのオープニング・シリーズは前期が1994年の11月と12月。名古屋フィルハーモニー交響楽団出演の「オープニング・ガラ・コ

ンサート」のほか、「アルバン・ベルク弦楽四重奏団」「プラハ室内管弦楽団」「クリストファー・ホグウッド指揮エンシェント・ミュージック管弦楽団」「高須博 ピアノ・リサイタル」「大地の響きシリーズI スカル・サクラ コンサート」など、後期は1995年1月~3月で「東京クワルテット&ストルツマン」「アジアの名手たちI中国・韓国」「アジアの名手たちIIインド」「バシュメット&モスクワ・ソロイ スツ合奏団」「武満徹 作品集」「作曲委嘱シリーズ 第1回 西村朗&新実徳英」「大谷康子・渡辺真帆子・中沖玲子 ピアノ・トリオ作品集」「日本室内楽アカデミー 佐々木仔利子と仲間たち 華麗なるコンチェルトの夕べ」「歌曲とアリアの夕べ」「アンサンブル・トゥーティ・コンサート」などであった。

アドバイザーとしてホールの運営計画などに携わった藤井知昭氏によれば、オープニング時の企画方針として「直接海外と日本の超一流演奏家に交渉する」「アジア・インドのアーティストを探り上げる」「日本の伝統文化を視野に入れる」「現代音楽作曲家に委嘱する」「地元の若手育成」「アマチュア音楽家の育成」が立案されてこの大型企画が実現したそうである。

「しらかわホールアマチュア室内楽フェスティバル」が1997年から開催された。応募資格として(1)室内楽を演奏し、楽しんでおられるアマチュアの方。(2)二重奏以上、指揮者なしの室内アンサンブルのグループまで。(3)アコースティック楽器に限る。という開かれた場でその一次テープ審査には100組近い応募があった。特別審査員に松尾葉子氏が招かれた。本格的な室内楽ホールでの演奏の機会はアマチュア演奏家には少ないこともあり、注目度は高く多くの応募を集めたと思われる。



三井住友海上 しらかわホール外観



三井住友海上 しらかわホール

自主企画事業を振りかえり

このように両ホールの初期の自主企画では内外の一流演奏家のコンサートに加えて地元演奏家やアマチュア音楽家に焦点を当て、その文化振興を試みる割合が高かったといえるだろう。こういった自主企画事業のコンセプトが過去に存在していたということ今回この時期に振り返り、名古屋のクラシック音楽界を考える「視点」としてみたい。

この後には両ホール共に地域的にも分野的にも音楽内容に関して視野が広げられ、日本各地のホールとの連携企画も実現するなど斬新なアイデアの企画が展開された。これからも、名古屋の室内楽の殿堂として多彩な企画を期待したい。

この人と...



画家

ひつ だ のぶ や

櫃田伸也さん

見たい風景がある。だから描き続ける

1960年代から一貫して風景を描き続ける櫃田伸也さん。1975年から26年間を愛知県立芸術大学で、2001年から東京芸術大学で教鞭をとり、現代アートをリードするアーティストを数多く育ててきた。大学を退職した現在も画家として、指導者として活動を続けている。そんな櫃田さんは、ひたむきに「描くこと」に向き合ってきた方かと思いきや、制作の原動力となっていたのは、「見ること」への貪欲さだった。

(聞き手:田中由紀子)

戦後の焼け野原が原風景

「僕の描く風景は、どこという特定の場所ではなく、あいまいな風景。ただ、愛知県立芸術大学を退官する際、それまでの作品をまとめて見た時に、子どもの頃に遊んでいた多摩川の土手の原っぱをはじめとする、戦後の焼け野原が僕の作品の原風景なのかもしれないと。描いている時にはまったく意識していませんでしたが、後になってそのことに気づきました」

櫃田伸也さんが描く風景画は、鮮やかで温かみのある



多摩川の自宅近くで兄(中央)妹(右)と

色彩や幾何学的な線や面による構成が特徴。近景と遠景がフラットに描かれ、過去と現在が交錯する抽象的な風景は、見る人それぞれにとって身近な空き地や広場を想起させる。

櫃田さんは、1941年に東京都大田区で生まれた。多摩川沿いに町工場が立ち並ぶ地域だった。

「東京で生まれましたが、物心ついた頃には疎開先である母の田舎の島根県にいて、小学1年生の2学期によく東京に戻ってきました。その頃には東京の焼け野原も少し片付いた感じで、まちに隙間がたくさんありました」

その「隙間」が、櫃田さんの作品の中でさまざまな空間として登場するのもかもしれない。

早熟な東京っ子

インタビュー中に少々驚かされたのは、東京で生まれ育った櫃田さんの「文化的早熟ぶり」。高校1年生の頃から美術研究所に通い、大人に交じって絵を描いていたというのだ。私立の男子高に進学した櫃田さんは、美術



高校1年生のころ

やって大学に行けたらと。東京芸大の夏期講習にも、高1の時から参加していました」

当時、東京芸術大学（以下、東京芸大）が受験生を対象に夏休みに開講していた実技講習には、同大を目指して何年も浪人している人も多く参加しており、年上でキャリアのある「猛者」たちと肩を並べていたわけだ。

「研究所に通うようになって、すっかり夜遊びの癖がつかまりました。9時くらいまで絵を描いて、その後、映画を見て11時すぎに帰っても、親は研究所にいて遅くなったと思っていたようでした。研究所や夏期講習で知り合った浪人生から、いい画集がある洋書店や、映画や展覧会の情報を教えてもらい、いい刺激を受けました」

精力的にアトリエの外へ

東京芸大には現役で合格。櫃田さんを語る際に、東京芸大に現役で入学し首席で卒業したことがしばしば挙げられるが、「現役で入れるくらいたくさん描きました」と櫃田さんが言うとおりの、高校3年間を描くことに没頭した結果だった。

しかし、櫃田さんが大学に入学した1960年は、安保闘争による学園紛争の真っただ中。東京芸大も例外ではなく、1学期中は授業がまったく行われなかった。櫃田さんもほかの学生同様に毎日のようにデモに行き、デモがない日にはクラス討論をやっていたという。

2学期から急に授業が始まったものの、1学期とのギャップに、気持ちがついていかなかった。大学には毎日行っていたが、帰りに画廊に行ったり映画や芝居を見

部には入部せずに、授業が終わると美術研究所に通った。高校1年生の時には、当時、新橋にあった光風会の研究所で、日展入選を目指す大人に交じって描いていた。2年生からは御茶の水美術学院、すいどーばた洋画会へ。

「高校受験の時に勉強で苦労したので、高校では好きなことだけ

に行ったりするのが楽しかった。

「100日間、毎日1本見ると自分で決めて、映画を見ていました。東京国立近代美術館のフィルムライブラリーに朝一番で入館し、フランスの古い映画やドキュメンタリーを見てから大学に行っていました。当時は状況劇場の唐十郎の芝居もたくさん見ました」

櫃田さんは大学のアトリエにこもって制作する級友を尻目に、大学の外へ精力的に出ていった。当時は言うまでもなく『ぴあ』のような情報誌やインターネットは存在しない時代。実際に画廊や劇場に行くと、「これは見なくては」という展覧会や映画、芝居の情報が集まり、さらに櫃田さんを外の世界に駆り立てた。そして、そこで見た美術作品や映画、芝居はもとより、そこで出会った人々から受けたさまざまな影響が、櫃田さんのものの見方や捉え方の根幹をつくり上げていった。

小磯良平に学ぶ

当時の東京芸大では、4年生から担当教官につくカリキュラムになっており、教官が決まらないと4年生にはなれなかった。新しい動向に敏感でアカデミックな絵画を描いていなかった櫃田さんの担任になってくれる先生は、なかなかいなかった。

「誰か担当教官につかないと4年生になれないという瀬戸際で、僕を引き受けてくれたのが小磯良平先生でした。先生はアカデミックだけれど新しいものが好きで、僕より数年先輩になりますが、高松次郎や中西夏之も先生の教え子でした。先生はデッサン力や西洋の伝統的な絵画表現に基づいたモダンで気品ある画風が評価されていますが、絵画の構造をきっちりとつくっているところに影響されました」

学生時代はポップアートやグラフィック的な作品から吸収した要素を、自分なりにアウトプットした絵画を制作していた櫃田さんだが、その後の風景画に見られる幾何学的な線や面による構成に、恩師の構造的な画面制作の影響が感じられる。

大学卒業後は就職しようと、映画関係やデザイン関係の会社をいくつか受けたが、全部落ちてしまう。しかたなく大学院に進学することにし、卒業制作も同級生より遅れて描き始めたものの、卒業制作作品は大学の買い上げとなった。



小磯良平先生(右)と

絵をやめて就職へ

大学院修了後は、助手として同大に3年間勤務し、その後NHKに就職した。映画や芝居が好きなことから、テレビ局に泊まり込んでドラマの大道具などを製作するアルバイトを学生時代からしていた櫃田さんにとって、自然な流れでもあった。映画からテレビへと変わる時代の動きを肌で感じていた。歌舞伎や映画の制作スタッフの多くが、テレビ局に入ってドラマを制作し始めた時期でもあった。

「27歳の時に就職しました。絵をやめようと思ったのは、学生時代に映画や芝居に触れて、絵よりも総合芸術に興味を持つようになったから。親も就職を喜んでくれて、絵具も全部手放しました」

NHKでは美術部にデザイナーとして配属された。しかし、いざ正社員になってみると、予想を越えるハードワークと会社の社風が性に合わず、1年ほどで転職することに。

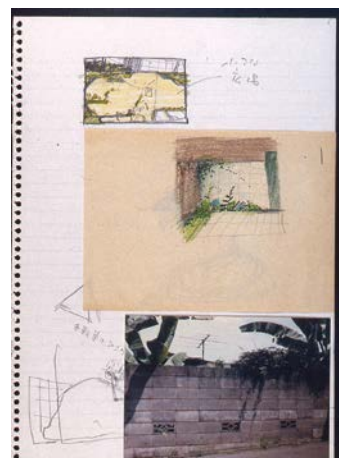
「学生時代からやくざな生活をしていたので、就職してやっと堅気になれたと思ったら、会社の体制や考え方の古さについていけませんでした。たとえば、長髪の髪を上司に切るように言われたので丸坊主にしたら、それでは極端すぎると(笑)。それまでずっとひとりで絵を描いて、勝手気ままできたせいか、サラリーマン仕事をするのがだめでした」

転職先の講談社フェーマススクールでは、当時、スタートしたばかりの美術の通信教育講座の講師として、

5年ほど勤務。この転職で時間の自由が得られて、絵画制作再開のきっかけとなった。

「NHKでは、現場で大道具の背景を描く職人の描き方に驚かされました。板一面をグレーに塗って等間隔に線を入れる。カメラをとおしてそれを見ると、コンクリートの壁に見えるという世界。これを油絵でやってみたらどうなるだろうと考えていました」

いわゆる書き割りの描き方から絵画のヒントをつかむ。櫃田さんの貪欲さがよく伝わるエピソードといえるだろう。



アイデアドローイング

教員として愛知県立芸術大学へ

画家としての活動と同時に、指導者として広く知られている櫃田さん。世界的に高く評価されている奈良美智をはじめ、杉戸洋・森北伸や小林孝亘、村瀬恭子など現代アートをリードするアーティストが櫃田さんの“放課後”の教え子なのだ。

櫃田さんが愛知県立芸術大学(以下、愛知芸大)の教員となり、愛知に来たのは1975年。講談社に転職した時もそうだったが、「やってみないかと」と声をかけてくれる人がいた。

当時の愛知芸大は、名古屋の都心部からの移動手段が乏しく、まさに陸の孤島だった。東京で生まれ育ち、東



愛知芸大の研究室にて 撮影:山崎陽一

京からほとんど出たことがなかった櫃田さんにとって、愛知での教員生活は退屈ではなかったかお聞きしたところ「情報や刺激が少ない代わりに、時間はありあまるほどあり、制作に集中できてよかったです。大学の敷地内にある官舎で暮らしていたため、奈良くんなど学生がよく遊びにきました」

月2回は上京し、展覧会やギャラリー、書店を回って最新の動向を吸収していた。愛知芸大の学生の多くは、櫃田さんのアトリエで東京の動向や海外の画集に触れ、情報を吸収していった。

2009年には奈良、杉戸、森北氏による企画で、櫃田さんのこれまでの画業と教え子19人の作品を紹介する展覧会「放課後のはらっぱ—櫃田伸也とその教え子たち—」が愛知県美術館で開催された。会場には自宅から運び込まれた画集や資料によってアトリエの一角が再現され、教え子たちが櫃田さんのもとでどのように才能を開花させていったかが想像できた。

「最後の展示室に、教え子が描いた僕の肖像画が展示されていたのが印象深かった」



「放課後のはらっぱ—櫃田伸也とその教え子たち—」展出品作家たちと
(前列左から2人目は2001～2007年に愛知芸大の学長を務めた島田章三さん)
撮影:鈴木芳雄

画壇の芥川賞、安井賞を受賞

愛知芸大で教鞭をとりながら国内外の個展やグループ展で精力的に作品を発表し、1984年に名古屋市芸術奨励賞を、翌年に安井賞、そして2011年には損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞。中でも、若手洋画家の登竜門である安井賞は画壇の芥川賞と呼ばれており、具象絵画を対象に贈られる伝統ある賞だ。

「受賞するまでに賞候補には何度かなりました。美術関係者から推薦された作品の中から選ばれるのですが、誰が推薦してくれているのか、どこで作品を見てくれてい

るのかもわからない。頑張りようがないわけです。賞候補になった年の展評に、僕の作品はそもそも具象とはいえないのではということが書かれました。でも、そのことに縛られるのが嫌で、もう具象でも抽象でもいいやと思いきって描いた作品が受賞できたのは、気持ちがよかったです」



櫃田伸也「風景断片」1984年 東京国立近代美術館所蔵
第28回安井賞受賞

Photo:MOMAT/DNPpartcom ※許可なく複製することを禁止します。

見たいものに出会えた時の感動が原動力

今回、お話を伺うまで、櫃田さんは淡々と絵と向き合い、無欲に絵のことを常に考え、そうした姿勢から生み出される作品が正当に評価されてきた方だと筆者は思っていた。しかし、実際の櫃田さんは、海外の最新のアートの動向や日本画の技法のみならず、美術以外のものからもさまざまな要素を取り込みながら制作を続け、キャリアを積んだ今でも自由で柔軟な感性を持ち続けている方だった。

「異質なものを組み合わせただけで、それまでにないおもしろいものができる。見ることも創造だと思うんです。いろいろな切り口をつなげて、編集していくのがおもしろい」

そんな櫃田さんが、最後に語った言葉が印象に残った。「見たいものがあるんだよね。でも描いてみなきゃわからない。描いていくと見たかったものがこれなんだとわかる。自分の絵でも人の絵でも、いいものに出会えた時にはすごくうれしい。まだまだ出会えるんじゃないかと、描いたり探しに行ったりするんです」

自分が見たいものへの貪欲さ。そして、それに出会えた時の感動が、櫃田さんの生きる原動力になっているにちがいない。

ピックアップ

近代戯曲研修セミナー「プロレタリア演劇特集」 戦いぶりを検証した熱き3日間

日本演出者協会東海ブロックがプロデュースする近代戯曲研修セミナーが2月14日～16日の日程で行われた。いわゆる近代演劇と呼ばれる作品群の中から、時に時代区分で、時に特定の劇作家に焦点をあてて、毎年この時期に行われているのだが、今年は「プロレタリア演劇特集」と題して、3本のリーディングに加え、講演やシンポジウムも同時開催した。今までなかなか光が当たらな



話題を集めたチラシデザイン

かった部分への大胆な切り口として話題を集め、県外からの参加や普段演劇とは縁の薄い市民も足を運んでいた。

公演は3日間に3本のリーディングが、1日2本ずつ、組み合わせを変えて発表され、それぞれの公演前後には、金曜にふじたあさや氏を招いての基調講演、土曜にシンポジウム①「この地域のプロレタリア演劇を検証する」、日曜にシンポジウム②「今、プロレタリア演劇は有効か?」が行われた。

上演作品の3本は平澤計七の「工場法」を劇団名古屋の久保田明氏が、秋田雨雀の「骸骨の舞跳」を劇団Hill Position!の油田晃氏が、三好十郎の「おさの音」を、なかとしお氏が、それぞれ演出した。「工場法」が当時の労使問題、階級闘争の具体的な事例をいろいろな角度から描き出し、「骸骨の舞跳」は理不尽な差別意思の根深さを不条理を絡めて示唆した。「おさの音」は直接的なプロレタリアとは距離を置



「骸骨の舞跳」の1シーン

きながらも、当時の民衆の社会感、価値観を紡ぐ人情劇として描かれた。3人の演出家は、いずれも台本に手を入



ふじたあさや氏の基調講演

れることなく、言葉も当時のまま扱い、それでいて丁寧かつ独創的で工夫に満ちたメリハリある舞台となった。つつい敬遠しがちなこのジャンルの戯曲の、単に主義

主張をアジテートするだけでない、戯曲としてドラマとして、想像力の喚起に満ちた、完成度の高さに驚かされた。

ふじた氏の基調講演では「そもそもプロレタリア演劇とは何か?」の自問から始まり、今回取り上げた3作家の知られざるエピソードや、当時の弾圧、検閲の様子、築地小劇場や新劇の俳優に与えた影響など、ふじた氏ならではの俯瞰した視線で、ユーモアふんだんに語られた。シンポ①では劇団名芸の栗木英章氏をパネリストに招き、現存する資料が少ない状況の中、松原英治氏の「名古屋新劇史」(1960年門書店刊)を中心に、具体的な劇場、警察署での戦いぶり、全国的組織「プロット」との関わり方、その収束ぶりを振り返りながら、3作品の演出家に上演の感想なども聞いた。シンポ②では「当時のやり方が、いささか言葉や台詞による直接表現に偏りすぎてはいなかったか」という検証もありながら、ややもすると表現の自由が脅かされかねない昨今において、プロレタリア的な主張を演劇の中で提示していくことの有効性を確認しあった。

頁の都合で詳細が書けないのは残念だが、具体的な作品の再現と、それに付随する講演、シンポジウムによる検証のバランスが取れた企画であり、まだまだこの時代から学ぶべきものの多さを確認し、今後につながる事業であったのは間違いのないだろう。(H)

いとしの サブカル

路地の奥で 猟奇王ごっこ

古沢 和宏 (ふるさわ かずひろ)

古書店主&ギャラリーオーナー。

1979年生まれ。『古書 五つ葉文庫』&『五つ葉文庫annex』店主、『gallery and more キワマリ荘』管理人。2012年、太田出版より『痕跡本のすすめ』を出版。

先日、豊橋で新しくお店を開かれる方より古本の注文があり、お届けにいった時のこと。住所を頼りに辿り着いた路地裏のそのビルは、とてつもなく妙なオーラを放っていました。

一見、ふつうの1階が店舗で2階が住居という横長のビルなのですが、そのビルの長い事長い事。えんえんと壁のように続き、しかも、そのビル壁はまっすぐのびているわけではなく、遠くにいくに従って大きく弧を描き、まるで城壁が町を囲んでいる様に見えるのです。もう、まんま『進撃の巨人』という漫画に出てくる、外敵をふせぐ壁の世界です。これは一体なんなんだろう、とオーナーに伺ってみたところ、ここはもともと川が流れており、このビルはそれを塞いで建てられている、との事でした。その名も『水上ビル』。なんでも、戦後の復興期に駅前にはもう新しい建物を建てる場所がなく、しょうがなく川の上にビルを建てた、という事なのだそう。ビルが曲がっているのは、川の流れてにそっているからだだったのです。そして毎年、地元のアーティストが中心となって『Sebone』というアートイベントが開催されているとも。こういう話は、アンテナを張っていたらもしかしたら耳に入って来ていたかもしれません。でも運良く

なにも知らずに辿り着けた事で、衝撃的な感動を味わう事ができました。僕は、こういう体験を「猟奇王体験」と呼んでいます。

「この路地の奥にはロマンが…」

これが猟奇王の口癖。『猟奇王』とは80年代頃を中心にガロなどのマイナー系雑誌にて描かれていた連作漫画で、タイトルに「猟奇」なんてついていますが、そういうスプラッター系な作品ではなく、普通の社会生活に退屈してドロップアウトしてしまった主人公「猟奇王」が、子どもの頃に夢見た、探偵小説や怪人小説の様な世界、いわゆるロマンをもとめて同じ様な外れものと一緒に町の片隅でぐだぐだやってる、いわば駄目なサブカル者の見本市な作品です。でも僕は、この作品が昔から大好きで、つつい路地を見かけると、覗いてしまうクセがついてしまいました。

今、ぼくは、犬山にあるギャラリー『gallery and more キワマリ荘』の4代目管理人をしています。ギャラリーといっても、外観はまんま築50年の廃墟アパートで、しかも犬山の観光地とは離れた住宅街の中に有り、入り口も解りにくく、まるで人が来るのを拒んでいる様な有様。たまに看板の前で入ろうか悩まれている方の姿を見かけますし、また、何度も入ろうと思ったけど勇気がでないと苦情を頂く事もしばしば。確かにもうちょっと入りやすくしてもいいのですが、でも、僕は、それをしたくありません。この路地裏っぽさ、迷い込む感じ。そういう「猟奇王な感じ」こそが、日常生活の、大切なスパイスだと信じているからです。

東海圏の路地裏には、まだまだ目に見えないロマンが眠っています。そして、そこに気付けるかどうかは、その人のアンテナ次第。週末は、散歩がてらサブカルな目線で猟奇王ごっこ、あなたも如何ですか？



キワマリ荘外観

名古屋市文化基金事業

文化小劇場 芸術三昧!シリーズ

6月

7月

チケットは、好評発売中です。

名古屋市の文化小劇場を会場としてお届けするシリーズ公演が始まります。6月、7月はバラエティーに富んだ4公演をお楽しみください。

米良美一 コンサート ～昭和の名曲から日本の叙情歌まで～



日時 6月27日(金) 18:45 (18:15開場)
ポイント 228-655
 映画「もののけ姫」で一世を風靡。その類まれな美声と音楽性で常に多くの聴衆を魅了し続けています。コンサートでは「もののけ姫」ヨイトマケの唄に加えて、軽快なトークと共に昭和歌謡のカバー曲も歌います。め~らの不思議なオーラに魅了されること間違いなしです!
会場 南文化小劇場 TEL 052-823-6511
料金 <全指定席>
 一般4,000円 学生3,500円
※観覧券の入場はご遠慮ください。 ※曲目は変更になる場合がありますのであらかじめご了承ください。

ウィリアムス浩子が贈る 星空ロマンスコンサート



日時 7月4日(金) 18:45 (18:15開場)
ポイント 227-521
 アルバムが2作連続ジャズチャート1位を記録。日本が誇る歌手として益々注目を集めるシンガー、ウィリアムス浩子。今回は、名古屋市科学館学芸員による天文解説つきで、星と愛をテーマにした名曲の数々をお届けいたします。七夕の前に大切な人とロマチックな夜を過ごしませんか?
会場 天白文化小劇場 TEL 052-806-8060
料金 <全指定席>
 一般2,800円 カップル5,000円
 学生2,000円
※観覧券の入場はご遠慮ください。

音魂・言魂 コンサート



日時 7月11日(金) 18:45 (18:15開場)
ポイント 227-528
 嬉しいことばをかけ合えば、笑顔の花が咲くはず。おたがさまの気持ちが生まれるはず。ことばの伝道師の村上信夫と木村まさ子。心を浄化させる中国揚琴の全重軍。この3人による心に響く朗読と心に優しい演奏のコラボでお届けするコンサートは、みなさんの「音魂」「言魂」を刺激することでしょう。
会場 中川文化小劇場 TEL 052-369-1845
料金 <全指定席>
 一般3,000円 学生2,000円
※観覧券の入場はご遠慮ください。

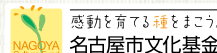
立川志らく・古今亭菊之丞 二人会



日時 7月16日(水) 18:45 (18:15開場)
ポイント 436-373
 気鋭の落語家にして映画監督、演出家、舞台俳優など多彩な側面を持つ、立川流の継承者、立川志らく。爽やかな口跡と色気の有る所作が醸し出す、艶のある高座、古今亭菊之丞。異なる持ち味の二人が魅せる競演会。どうぞお見逃しなく!
会場 北文化小劇場 TEL 052-910-3366
料金 <全指定席>
 一般3,600円
※観覧券の入場はご遠慮ください。

チケット
取扱

- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387 (平日9:00~17:00/郵送可)
※名古屋市文化振興事業団友の会会員は1割引(学生料金は割引対象外) (名古屋市文化振興事業団チケットガイドと名古屋市文化振興事業団が管理運営する施設窓口での前売り扱いのみ)
※市内13文化小劇場、市民会館、芸術創造センター、青少年文化センター、名古屋能楽堂ほか事業団が管理運営する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
- チケットぴあ TEL 0570-02-9999
※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。チケットぴあでは手数料等が必要になります。
- 名鉄ホールチケットセンター TEL 052-561-7755 (10:00~18:00)
※「米良美一コンサート」「立川志らく・古今亭菊之丞二人会」のみ名鉄ホールチケットセンターでもお求めいただけます。



主催 **名古屋市文化振興事業団**

公演に関するお問い合わせは名古屋市文化振興事業団チケットガイド (052-249-9387) まで

一味違う印刷をお探しのあなた!
 箔印刷は押してましたが、今は
箔がっつくんです!!
 (コールドフォイル印刷)

鬼頭印刷株式会社

Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
 data@kito-net.com www.kito-net.com
 〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

We make you move

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
 〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
 TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
 ハイビジョンで撮影し
 ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
 TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
 ◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・パレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
 TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営